

# これからの時代、 世界的に重要となる 自然崇拝と祖先崇拝について③

—— 縄文時代は何故、今人々の心を捉えるのか ——

農食健研究所

(株)医学研究所

(株)人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

(前号から続く)

## (8) 縄文人の自然崇拝と 自然への畏怖の形成

豊かな日本の自然の中で、主として採集生活していた人々は、既に炉を用いる事は出来るようになっていたが、何といっても生活は、日(太陽)が出るのと動き始め、日(太陽)

が沈むと住居の中で静かに過ごすというスタイルであり、何よりも人々にとっては昼の太陽と夜の月と星とが関心の的であったのだろう。

日本ではないが、漢字において、太陽(日)と月とを一緒にして「易」という字を作り、これに変化という意味を与えた。地球上の諸々は、太陽と月からのエネルギー(電磁気、光、重力等々)により主として変化

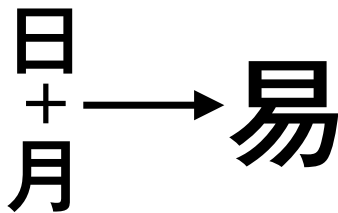


図6

させられ、その作動流体として、水という地球上で、稀な物質を活用している。

自らの周囲を取り巻く「空気」もまた、身近な存在であり、関心の対象だったのである。まさに「地」、「水」、「火」、「風」、「空」である。これに「識」を加えると真言密教空海の「六大」の思想になる。おそらく縄文の人々も、この太陽と月との

動きに深い関心を示すと共に、彼らの一番の関心事の自然の中の食用に供する動植物の成長や動作が、日月を始めとして宇宙と深く関わっている事に気付き、宇宙(天)の諸々の星々の存在と運行と共に、自らの意識の中に宇宙の諸々への関心を取り込んでいったのであろう。月と共に一番星として輝く金星は夕暮れと明方に見えたので、いち早く人々は、関心を持っていった。と同時に、いつも変わらぬ北極星は人々の意識の中に強くその存在を天の王座として訴えたのであろう。

と同時に毎年実をつけるクリ、クルミやドングリも多くの草花も彼らにとっては、その詳細のメカニズムを知るまでに行っていない事により、動かしている実体としての精霊をイメージする事は自然の成り行きであり、自らの能動的な力では、どうにも出来ない受身的な感覚を育てていき、諸々の存在の勢力を司る霊、あるいは神をそれらに対峙させるのは、むしろ自然であった。

他方で縄文の人々にとって自然は災害をもたらす存在であり、自然が怒りを発する事を、なす術なく恐怖

のまま過ぎ去っていくのを待つというしか無かったのであろう。おそらく、そこに働く神秘的な力を想像し、畏怖の念を抱いたのであろう。そうした意味でも、自然への感謝、感動、感激と共に、自然への恐怖や畏怖や不安を抱いた。それらが全て合わさって「自然崇拜」になり、自然とどう折り合いをつけて生

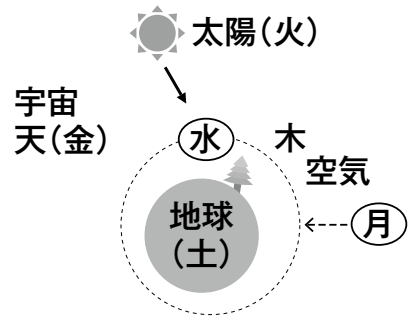
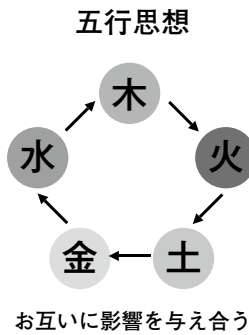


図7

活を安全にするかが、彼らの自然との距離となり、様々な生活イベントが形成されていく事になったのであろう。

まさにそこには「悉皆仏」の前身としての「悉皆神」あるいは「悉皆霊」的考えが育ったのであろう。

我々が注意をせねばならないのは、縄文時代の前に旧石器時代があり、既に原始的な石器を用いて、ホモファール(工作人間)としての機能を発揮していた事である。縄文時代は、その石器を黒曜石等を用いて高度に加工し、使用を始めた事である。

さてここで縄文時代の自然崇拜は、彼らの行為の中でどのように表現されていたのであろうか? 何よりも諸々に生命が宿していると理解するので、諸々を大切にすることを心掛けていた。仮に生命を頂いたものに対しては、自らがそこに生命体を戻したりしていた。林であれば植林である。何よりも無駄をしない姿勢に溢れていたという。そこには生命の輪廻転生という事に対しての愛情深い思いが育っていたのであろう。

それは、日本の職人の特質の1つとされる道具を大切に扱うという事に対しても、縄文時代の人々にも、その意識が原初的に根付いていたのであろう。それは多くの縄文時代の遺物を展示している博物館や民俗館を訪れて、縄文人の生活を再現したパノラマを見ると、道具を入れる空間があり、そこに大切に保管されると共に、手入れが行き届いているのを見るのである。

但しこれは博物館の展示をする人間が見せる為との考えもあるようだ。

そして縄文人の死生観は、宇宙というマクロコスモスが1つの巨大な生命体であり、人間というミクロコスモスは、そのマクロコスモスの一部であり、死を迎えるという事は宇宙全体へ還る事であり、死後の世界への不安は少なかったと言えるであろう。そこには明らかに「宇宙即吾」の感覚が既に原初的にあったと言えるであろう。

死に恐怖の無い人間は、生を堂々と生き続ける事が出来る。それ故、縄文人は堂々と生を生き続けていたものと考えられるのである。

さてここでもう1度、自然崇拜に

ついで考察してみよう。先ほど、自然への「感謝 感動 感激」と逆に「恐怖、畏怖」とが、自然崇拜を生んだと語ったが、自然の脅威等から、自然を忌避する心は生まれなかつたのであろうか？

少なくともヨーロッパにおいては、雨が年間700〜800mmと少なく、氷河に削り取られて出来た大地であり、日本のように海の底が隆起して出来た有機物の豊かな堆積岩や火山岩等から構成されてなく、「豊かな森」の1つと称されるドイツの「黒い森（シュヴァルトツヴァルト・Schwarzwald）」にしても、数種類の針葉樹から構成されている。日本から見ると貧弱な生態系の森なのであつた。そうした厳しい自然の気候での生活はヨーロッパの人々の意識に、「自然は悪魔の棲家であり、諸悪の根源である」とある

時期まで考えさせ、自然に対抗して、その生存を確保していくスタイルを「選考させたのであつた。建物は自然を圧するような城や寺院や大建築物を造り、民話では多くの悪魔が登場し、狼を怖がる物語が生み出された。

縄文時代にも、ヨーロッパ的に考

えて良い側面はあつたのであろう。しかし日本の自然の豊饒は「自然は神の棲家であり、善の根源である」と捉える程のレベルの豊かさを人々に与えていた。そこには住みにくい環境のヨーロッパでの生存と、豊かな環境での生存の日本という違いを見る事が出来るのである。

やはり「衣食足りて礼節を知る」であり、豊かな環境が豊かな考えを生み出すと言えるであろう。縄文時代の日本の自然環境の良さが、1万年以上もの年月を大きな争いも無く過ぎさせた1つの大きな理由と考えられるのである。この事が、これからの時代を考える上で、どう反映するのか？そこを考えなければならぬ。

### (9) 縄文人の祖先崇拜

基本的に祖先崇拜は、キリスト教には明確に見受けられず、日本人においても水田稲作農業が定着し、本格化した弥生時代から発達したと一般的には説明されている。しかし、その原初的形態は、縄文時代にもあつたのではなからうか？水田での稲作農業が出来るまでの過程は、1

世代では済まず、先祖達の努力を通して完成していく。それ故に、先祖への感謝を中心とする祖先崇拜が醸成されていくのは至極当然であるが、そう考えると縄文時代のかなりの時間帯で、根茎類と雑穀の栽培が畑を切り拓いてやられており、更に末期には、原始的な今もアジアの一部でやられているような稲作が始まっていったと最近の学説では捉えられている。そのみでは祖先崇拜の必要条件の1つであつて十分条件ではない。しかし少なくとも縄文末期には、祖先崇拜が出来上がっていたものと推定される。

何故それが言えるのか？水田稲作程の時間はかからないが、個々の人々が住む住宅（竪穴式）は、おそらく1世代のみでなく、何世代かが使用していたのではないかと考えられる。その世代間を繋ぐ住居生活の中では、前の世代に対しての関心は必然的に生まれるものと考えられる。

しかし、人の死に対しての考え方は、縄文人は巨大な生命体としてのマクロコスモスに還るといふ考え方であるから、死そのものを、そして

死後の世界を模索するエネルギーは生まれにくかつたとも考えられるのである。

少なくとも縄文前期までは、独自の墓場は無く、死体は残骸等と他のモノと一緒に捨てられていたとも言われる。その段階においては、祖先崇拜は無かつたと見るべきであろう。その後、徐々に縄文の時代が進むにつれて、祖先との関りが感じられる事が増えていったものと考えられる。

既に縄文中期になると、円環環状の中心に墓場が出来、周辺に広場と、その同心円状に竪穴式住居が並んで建てられるようになっていった。

墓場を中心にとってくるのは、祖先崇拜の1つとして生きている人間と死んだ人間の霊との接触の場との意味があると今日では語られるが、その当時はどういふ意識の下に集落の中央に置かれていたのであろうか？

更に環状列石、ストーンサークル等が登場するようになると、明らかに祖先崇拜の意識は高まり、1つは先祖との結縁の必要性を感じ取り、その結果として墓場がごみ捨て場か

(10) 縄文芸術

私は、縄文時代の火焰型土器のデザ

ら抜け出して独自に造られ、何らかの儀式がそこでなされていたようだ。広場は祖先祭祀の場であり、葬送の場であったと見て良いだろう。更に集落外環状列石に至る一連の動きは、縄文社会を巡る祖先崇拜の高次化の過程そのものであると捉えられている。

とりわけ、大規模な集落外環状列石の形成は、縄文時代における祖先祭祀の1つの完成された姿と理解され、祖霊を祀る為に、歌舞、飲食を催し、最高のステージと位置づけられている。

また環状列石や集落外環状列石の近くに倉が存在しているケースが多いが、その倉は精霊が居ると考えられている。

いずれにしても、縄文時代が進む過程の中で、祖先崇拜の体系が徐々に強まっていった事が判るのである。

祖先崇拜の思考は同時に未来への思考の強化でもある。そして今を大事にする事でもある。



火焰型土器  
新潟県長岡市出土

インの何とも力強い美しさ、そのスタイルの良さに強く魅せられている1人である。何故あのような作品(いや、彼らは芸術品として他者に見せるものとして作ったのではなく、生活の中のイベントの必需品として作り出したものなのである)。それ故に作品や芸術品と呼ぶのは必ずしも適切ではないかも知れない)を生み出したのであろう。

何よりも太陽のプロミネンス(紅炎)のような火炎(焰)状のものは、一般的に生活に必要な土器としては、あまり必要はないものと考えられる。従ってそこに与えられているシンボリックなデザインは、何らかの祭祀とか、生活の中での象徴的イベント用に作り出されたものと考えられるのだが、事実は何と調理用の鍋であった。

世界の4大文明では土器は、単に収納器、運搬器として用いられていたが、日本の縄文式土器は煮炊きをする器、今で言う鍋替わりに用いられたのであった。その点が違う点である。硬い実や、渋味や苦味を除去するのに必要とされていた。

土器は、ろくろはまだ未使用で、細長い紐状のものを積み重ねて、600~800℃で野焼きの状態で作られ、黒褐色、赤褐色のものが多く、低温焼成なので、もろく、割れ易かったと言われる。

縄文時代には、それ以外にも、沢山の生活上の美術工芸品が生まれている。

1つは装飾用のヒスイ等を用いた宝石類であり、もう1つは祭祀用の品々である。土偶

土器の特徴

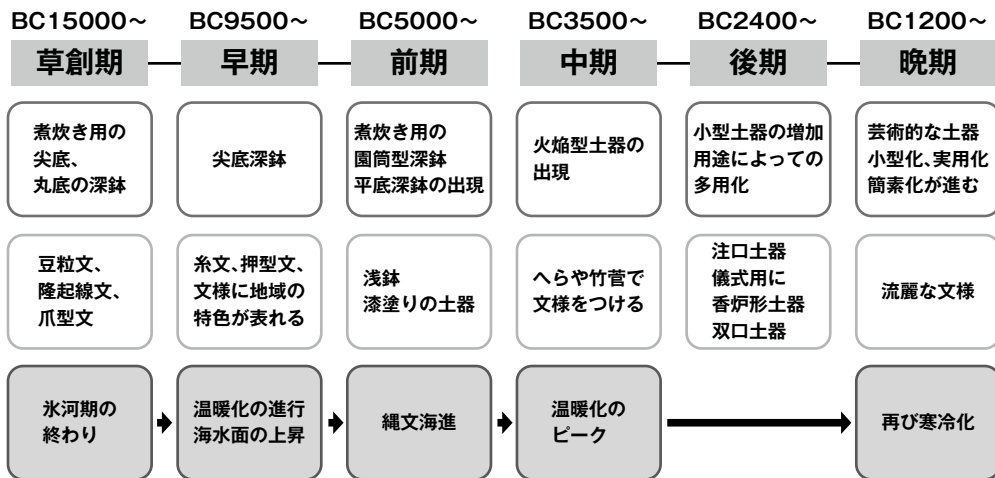


図8



三内丸山遺跡

れらを用いて、豊かな創造力が、そうした品々の創造に發揮されている。

衣装に関しては、植物の葉の繊維を抽出して、巻頭衣を始め、様々な物が造られてきたが、デザイン的特色はあるものの、まだ今日でいうファッション性が高い訳ではない。生地、織物技術、デザインすべての分野で、まだ実用レベルを出ていなかった。しかし、それは今日の姿から見ての判断であり、当時には先端的な技術であり、ファッションであった筈である。

を始め、様々な神や精霊、そして先祖を祀る品々である。  
1万年以上の長い期間と、日々の生活の中の午後の時間、あるいは狩猟、採集に出られなかった時間、そ

しかし注目すべきは、三内丸山遺跡等で見られる漆の使用である。様々な工芸品等に実用的な接着剤や防腐剤、あるいは塗料として利用されている。漆は木に傷をつけてそこ

から汁を出し、それを容器で溜めて採集する、比較的入手し易いものであったのだろう。

また黒曜石を用いた刃物や、釣り道具にしても、単に実用的機能のみでなく、原初的とはいえ、デザインの要素が入っており、単純な生活の用具から、その当時の人々の美意識が反映されたものとして仕上げられている。かなりの部分で、実用性と共に、美術性が中期以降の品々には加味されていた。

### (11) 縄文人の「円」思想

縄文時代の人々の考え方を知る上で最も大切なのは、「円」である。その生活の場は広場を中心とした環状同心円での生活の場(空間)で構築されている。何故、同心円状の生活空間なのだろうか?その背景には、以下の考え方が潜んでいる。全ての存在が平等であり、そこには神(精霊)が宿り、諸々の存在がそれぞれ自体の固有の価値を持ち、そこには身分差も無く、自然を傷つける発想も無い。

その対象の存在が、お互いに和して共生する事が生活の要であった。

それ故、三角形の無限の集合体であり、角の無い円形である「円」が縄文時代を表すシンボルである。座禪においては、円は天を表すシンボルでもある。次の弥生時代は、広場は無く、「区分」がシンボルの世界である。そこではばらばらに住宅が建てられた。

縄文の人々の宇宙観、死生観は、上記の考え方からも判るように、人間も神の一部であるし、現存の自分の姿、形も大宇宙の全体の一部として仮(虚構)の世界に生を受けているのであり、死んでも全体の元へ戻るだけであり、そこには不安を感じる必要も無く、実際に感じていなかったと言われる。

死をしっかりと意識の中に捉え、人間の生は、堂々としており、小さな出来事に感じさせる事の無い人生に自らとなっていく。

そのような考えると縄文の人々は出来るだけ、静かにお互いを共生しあって、その生存を展開していたので、争いも少なく、大きな戦いも殆ど無い時代であったと捉える事が出来る。それ故、逆にひとりひとりの想像力を人間関係以外のところに働

今まで論じてきた点について、見事に展示をして、説明してくれるのが諏訪市の博物館である。

茅野市の隣が諏訪市である。その諏訪は、私の亡くなった兄が、ヤシカというカメラ会社に早稲田大学を卒業してから勤めた会社である。それで私が中学生の頃に、何度か連れて行ってもらった場所である。それと共に、セイコーグループとの関係が深く出来、セイコーグループの中核となって長野県に「ハイランド構想」と「レイクランド構想」という2つの工業団地構想の展開の計画を有していて、その会合に何回かお招

## (12) 諏訪市博物館を訪ねて 〜縄文時代を理解する鍵が 展示に〜

かすことが出来、あの素晴らしい縄文土器を始めとする産物を作り上げたのであろうと推察出来るのである。

この「円」思想こそが、これからのトゲトゲした人間社会を改善していく上で、本質的な重要さを持つ事になるのである。



諏訪市博物館

きをお願いした。諏訪市の会場で、講演をさせていただいた。そして夜は、諏訪湖に面した料亭兼ホテルで御馳走になった。残念ながら、その時の話しの内容はこれからの工業社会から情報社会への転換の話が主であり、この地方の持つ文化の話や、未来の展望の話は場が違うので、殆どしなかった。

しかしそうした事もあって諏訪市への思いは、様々に残っていて、その後も事あるたびに諏訪市の周辺を訪れていた。特にKITZ（北沢バルブ）の作ったガレートとドーム兄弟

の美術品や、ガラスの芸術品や宝石を展示した北澤美術館を良く訪れた。しかし不思議な事に、諏訪大社へ兄に連れられて1度は行った筈なのだが、その記憶が薄れていて、そこで今1度訪れる事にした。何とも靈感の漂う世界であった。この事はまた別の機会に触れる事にする。

さて、そろそろ本題に戻ろう。2023年12月の初旬に諏訪の少し先の松本に行つて、信州の酒のみを提供する「酒と雪」という山男の集まる居酒屋へ行つた後、安宿に1泊をして、翌日茅野の頼岳寺と宇宙庵を訪れる前に、諏訪

市博物館へ行つてみようという事になり、そこを訪れた。諏訪市博物館の縄文時代の2階の常設展示場を訪れた時に、その展示物の素晴らしさと共に、展示の仕方に深く感動させられた。その展示がまさに「縄文時代の人々が、どのような意識の中から、縄文

時代の諸々の産物を生み出していったのか」を巧みに描き出すように展示設計がなされていたからである。単に展示物を飾るだけではなく、縄文時代の人々の意識の変遷と彼らの営みとが対比され、かつ体系的に展示されていたのであった。その内容に関しては、ここまで詳しく説明してきた事である。ここで触れておくべきことがある。それは、我々が世界の4大文明として「メソポタミア文明（チグリス、ユーフラテス川）エジプト文明（ナイル川）、インダス文明（ガンジス川）、黄河文明（黄河）」を習ったが、「その説明が本当に正しいのか？」の疑問である。というのも、その時代と同じか、部分的にはその前までを含む形で日本という地で、縄文文明が花咲いていたし、何と他の文明の続いた期間より、遙かに長く約1万5000年もの間、争いも無くその文明を誇っていた、その事である。

我々は、その歴史的年代に注目すると共に、その文明の続いた長さにも注目するのである。今から約1500〜3000万年前位に、南アメリカ連邦とタンザニア付近で誕生し

た人類が、今から10数万年前にホモサピエンスになり、数万年前から北上を始め、上記の4つの文明の地へ辿り着いたと我々は学校で習ってきた、

しかし明らかに、そうした4大文明の地から日本の地へ文明の流れが達したと考えるには、年代が必ずしも合わないところがある。ひよっとすると、陸地からの文明の伝播ではなく、海からの伝播なのか、それとも南アフリカ連邦、タンザニア以外の所での人類の発生が、別に独自にあったのか、そうした疑問はあるが、少なくとも1万数千年前から4大文明と同じか、その以前から縄文文明は展開し始めていたのであった。最近海に沿って日本に来たとの「海進説」がかなり支持を得ている。

明らかに4大文明からの影響があったが、その前に日本列島で栄えていた文明があったのかも知れないという疑問が残るのである。但し、縄文文化の展開のピークはBC3500年位を最栄期としている。その後の衰退は小氷河期の到来により、自然の果実や草木が減り、食糧難から大幅の人口減少が生じたと言

明されていることは前述の如くである。

### (13) 縄文時代の何が これからの地球上での 人類の生活設計に役立つ

今まで、縄文時代の人々の生活の姿とそれを支えるバックグラウンドとしての考え方を述べてきたが、それは果たして、これらが地球社会の次の好ましい社会を建設する上で役立つのかどうか。それを論じる為の材料としてここで示してきた訳である。ここでは、それらの材料の上、縄文時代の姿や考え方が未来社会の建設に役立つ可能性への私なりの結論を述べねばならないだろう。

結論的に言えば、1万年以上も連続して大きな争いも無く、それなりに平和に出来たのは、この地球上での生活を、その時代に縄文人が日本列島で永らく争い無く出来たのは、「天の時 地の利 人の和」の3拍子が揃ったからだと考えられる。それでは、その3拍子がこれからの地球社会において当てはまるのか、どうか。それを具体的に考える

事が重要なポイントである。

#### 第1の「天の時」

である。縄文時代は気象学的に温暖期に向かい、自然そのものが豊かになっていくと共に、人類の生存環境としても好ましい状況になった。それは晩年に向かってから徐々に厳しくなっていくが、1万年以上の長きに渡って好ましい天の時であった。またまだ人口の規模も小さく、自然の与える恩恵を全員が享受しても大丈夫であったし、人間の生態系環境も自然の持つ復元力や浄化力の範囲であった。と同時にそれを維持する努力の跡も見られる。そこそが次の地球上での人類の存在に



縄文時代は「天の時 地の利 人の和」の3拍子が揃った

とっては不可欠の営為である。

#### 第2の「地の利」

は、日本の大地が豊かな水や水産資源と自然の産物採集に都合が良く、また獣との生存闘争においても程々良い環境であつ

たと思える。主として猪と鹿が捕えられた。まさに地の利を巧みに選んでいたのであった。しかし時々火山の噴火、地震等が生じたこともあったが、いつも復元していた。

#### 第3の「人の和」

であるが、「鶏が先か、卵が先か」であるが、そうした「天の時 地の利」の良さが人々の心を安らがせ、お互いの和を大きく保つ方向に働いていた。まさに「円」の思想の貫徹である。その



お互いの憎悪、憎しみの方が、お互いの思いやりや愛より勝る不幸な時代

更に、人の和は、イスラエル・ハマス戦争や、ロシア・ウクライナ戦争に見られる如く、お互いの憎悪、憎しみの方が、お互いの思いやりや愛より勝る不幸な時代であり、和どころ

は地域全体で進行中であり、既に復元力  
を失い、砂漠化する  
所が農地で500〜  
600 haあり、年間  
1560万 haの森林  
が失われている。地  
の利も悪くなって  
いる。

安らいだ、生活から生まれた心が更に村落での人々との和を高めていったのであろう。  
今日から明日にかけての地球の状況は、2030年に向けて小寒冷期が訪れ、そこでは食糧危機や水危機、あるいは寒さの被害、危機が縄文時代の末期のように訪れてくる可能性がある。その意味で「天の時」は人

類のこれからはしばらく「悪い」と考えるべきであろう。但し、これらの寒冷期は10年単位の変動と言われ、11万年サイクルの氷河期とは異なる。なお人口も80億を超え、まだ増加し続け、100億に至らんとしている。これまた「天の時」としては「悪しき時」である。  
そして、地の利も自らが招いたとはいえ、環境悪化

か不和の方が強まっている。  
そう考えると、この「天の時」地の利、人の和は、これから先悪化していく一方であると今のところ考えねばならない。そうした時に、縄文時代は考え方として我々が採用すべき好例としても、そのベースとなる条件が異なり過ぎてしていると判断せざるを得ないのである。  
しかし我々人類は、このまま終末（エスカトン）に向かって行くのではあまりにも不条理であるし寂しい。そうであれば、まさしく「天の時」地の利、人の和の整っていない。いやむしろ悪化している地球社会において縄文時代が抱いていた、

といった事を今一度学び直し、「天の時」地の利、人の和を好転させていくしか方途が無いのだ。人類最後の戦いなのかもしれない。  
何よりも、自然崇拜と祖先崇拜の欠如している西洋科学技術文明とキリスト教文化の欠点が、今日露出しているが、それを補完する意味でも、この縄文時代はひとつの将来の地球上での望ましい生活像ということになるだろう。  
やはり過去を大切にすることは、結局未来を大切にすることに繋がる。キリスト教に祖先崇拜が無い事は子孫を大事にしないで、「神だけ、今だけ、自分だけ」の考え方を招いてしまうのである。

- ① 自然を大切にし、仲良く共生し
- ② 自からを宇宙の一員（宇宙限吾）とし、共に生き
- ③ 女性、子供を大切にし、老人を慕い、敬い、更に祖先崇拜をし、
- ④ 周りの人々や村落や村を隣人とし、共に生き
- ⑤ 高度の土器文化を発達させ
- ⑥ 日々を大切にしてい

そして同じく、自然崇拜の欠如も、既に招いてしまっているように、自らの棲家としての地球そのものを破壊し、自らの棲家を破壊し、他の生命体の棲家も奪ってしまっている。  
そうした中で、縄文時代の生活と考え方は、明らかに地球上のすべての人々に1つの示唆を与えてくれているのだ。それ故、今日の縄文ブームが生じているのだ。